ザこ

それ一代乃教法ハ五時八教を
化儀乃教内教分段分ち於わ
五時とハ以とは華厳阿含方等
般若法花四教とは是蔵通別圓
たゝ遮那教主乃秘蔵を受玉ふ
嫡弟乃燈をひろめしより以来
流り傳法宗教をさかへむるゝ

あまつさへなく法とうや　鶯の
清山を繞すかたく一佛乘の
峯は慈悲の力恵月まとかなり
とりわき三寶を尊む常樂と
なりし所の實たぐひなき御山
の形く
げにや八古敵乃跡を
もし松風ハ宛轉と成りて
石上にちかくなめらかなる
岩路をあけ通りて濃水ある
さてこゝの本尊とは薬
詞
いかに此庵室此うちへ案内申
上詞
御前の堂の前より心を
すまし所に案内申さんとは
いかに案内申さう
上詞
是は此あたりに

住居仕り候得共てらん玉秋院
御方うるへきを清あそ秋兄母
よわ哀たりり至中さと延こも
き寂うはこ私事中さんしあに
兄まそ参わする　半　兄ハ思ひも
よらぬ手をさはも濃りな哀哉
こりけ中とは思ひもうらりん

三丁

郭京小院乃あたわまそ濃清手
ホカル
あわさき大めんく思召あすく候通
かりわ濃清にて候さしなとの哉
中あ家さらん此都ヱよはこと
詞
まそも西連清望こ濃手ありて
翁郎りの郎へ中通し　半　候よ
さる事此帝一あわ又乃不足哉

かなへたまはむ事此世の望ミ
更にありしたゝ粉骨ま山まて深
御説法の有様またあさま小
孫四郎申候ふうん　ふ旅さう
やは説法のうみなき法の様よ
おかしめさ守公孫四郎申庵し
まわなるらた居とし思召候

なるはあなたは家あしうる
庵かすひて艶ひたきのふなと
このへはくも庵くるしく
さるあるたあさりみえたる杉
一おまたちよわて月哉ふさ袴
猶折ひ仏の法説乃きこえなは
其時両親をひさきえよく

は滝ハ、らん光月のと入まは
雲きわかくゐ雨露あしなと
深く光あ遊ミ見ち徳
木陰葉をさ流と明あ常て楷る
あゝ里谷入りなるたわの葉けつ
後
やうかう暮れ母ゆわくうに
山はちいき泉流ち金生我成

上
うるり遊へよたの葉子をなし
海ハ深うなより流をゆししに
遊入りかのききちと我なに
少しきや虚空に音楽響なく
佛乃法雨うふやゆ雨飛を
ひゝきあたわを入遠は山を
成なりち高山となわ大地ハ

ちゑ陀羅に　木のみ七重宝樹と
なりて　釈迦如来師子座に
観音勢至大普賢文殊左右に居
給へり　菩薩聖衆雲霞のことく
つらなりつゝ　天龍神八部
在厳く拝し以て称へきわ
遊楽阿弥陀の大光明を称う

阿弥陀の大光明は一面小坐ときわ
空より四維の花降りわ天人
くもいよりはわ微妙の音楽を
奏しい来府心の法門を説給ふ
かゝるありがたききしもな
僧正もたちまちにく
信心をこらし増寿の渡眼り

浮ひ一心に合掌し帰命頂礼
大悲薩王の救世如来と恭敬礼拝
いる程に仏像よ厳しくき震
奇し奇特天よりわか星の折ふしと
忍辱よわ天狗を飛くさりふ
なう我を明しけふしむせるよ
寄那りるに喜見城のく奇歌

あるいは数千の鹿沸を浅間に
那をはき行歌大空わく〳〵に
奇特そうみえうわ童風奇歌
此時はる里折ひくかりわ震
院老我なも舞ひときまち
去来く〳〵に若を三極高さの人なる
羽風をふそゝの急ら舞と従進

ともにちわ羽にあ津まか行も
りなりしをはたちまち飛車里祭し
中きは舞歌及雲路をさくし去
ありしきたきの羽ゝ翼と天狗は
岩根を踏ひ下はとみえし
岩根をつきひなるたる晃尺して
深谷は岩洞にいりけり